

紙面から

教育随想

「子供はどの子も先生に愛されたいのだ」

岡崎市市政顧問

中村 巽氏

羅針盤

「運動の真の楽しさを知る」

保健体育科指導員

永田 勲

この人に聞く

岡崎市ボランティア連絡協議会副会長

鈴木 珠子氏

特集

「角界の新星―琴光喜―」

ふれあい

「スペシャルスパイス」

六ツ美中部小学校 森田 照美

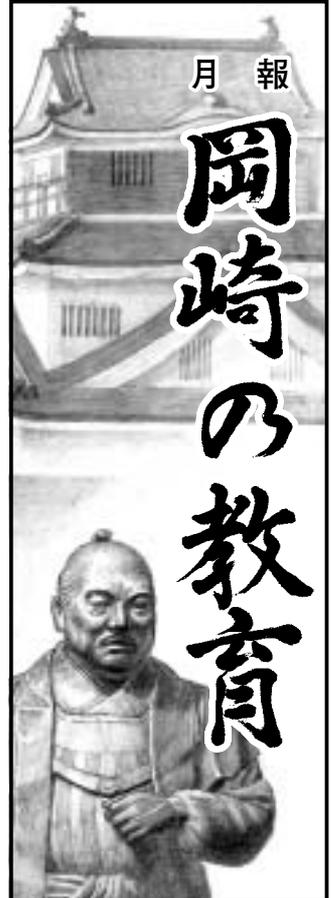
師弟同行

元六ツ美中学校長

上地小学校長 河村 喜美

フット・ヒストリー岡崎の教育

給食室完工（昭和二十九年）



2月号

平成13年2月1日

発行／編集
岡崎市教育委員会



大門茶の収穫



大門カーニバル

今月の学校紹介
～大門小学校～

広げよう
思いやりの輪
気づきの輪



しめ縄をどうぞ

— 教育随想 —



子供はどの子も 先生に愛されたいのだ

岡崎市市政顧問

中村 巽



少人数教育推進のため、教員増員
の予算が計上されることになった。
嬉しいことではあるが、学校教育の
諸問題は制度の改革や指導体制の強
化だけで解決できるのであろうか。

私が小学校一年生を担任したと
き、四十一名の児童の中に日本脳炎
による障害で三年間の就学延期を受
けた永井利朗君、脳性小児麻痺によ
る二年間の就学延期を受けたOさん
の二人がいた。Oさんは身体障害の
ため着座して授業を受けてくれる
が、永井君はそうはいかない。彼と
手をつないだまま授業をせざるを得
なかった。彼のための学習指導は夏
休みの家庭訪問による個人指導だけ
だったといえる。
そんな彼が二学期から私の帰宅時

間になると洞町バス停に立つようにな
った。バスの中に私の姿を見つけ
ると手を振って見送ってくれるので
ある。夏休みの家庭訪問で、私と彼
の人間関係が深まったからである
う。

翌年四月、組合の青年部長に就任
したことから五年生の担任に変わっ
た。二年生になった彼の教室には私
は行かないことになる。すると彼は
「先生がいない」と騒ぎだし、新し
い担任の手を振り切ってほかの教室
を覗いて回り、五年生の教室で私を
見つけると入ってきて立ったまま動
こうとしなかった。私は彼の担任と
校長先生に相談して、そのまま彼を
預かることにした。しかし、一時間
もしないうちに彼は「皆のところへ

帰る」と言って二年生の教室へ帰っ
ていった。

それから四年後、私は定期健康診
断で肺結核と診断されて愛知病院に
入院した。このことを知った彼は、
家が近かったこともあって、日曜日
毎に病院へ遊びに来てくれた。しか
し十分もすると「さようなら」と
挨拶して帰っていったものである。

その彼は十八歳で他界してしまっ
た。法名「恵利院釈真朗」、仏となっ
た彼の笑顔が鮮明に思い出されるの
である。

城北中学校第一回卒業生の担任を
したとき、五十一名の私のクラスに
は「岡崎の総番長」といわれた木
俣仁志君がいた。彼はいま会社社長
として自社ビルを持って「中卒の社
長では大変です」と頑張っている。

名古屋大学教授で「猿橋賞」の受
賞者高倍鉄子さんが、「小学校四年
生で中村先生と出会って、勉強が好
きになれたお陰で今日がある」と、
取材記者に語ってくれたそうだ。

どんな子供も先生に認めて欲しい
のである。教師受難の時代と嘆かず
一人一人の子供と向き合って、その
子供のために何がしてあげられるか
を真剣に考える教師でありたい。

(なかむら たつみ)



運動の真の楽しさを知る

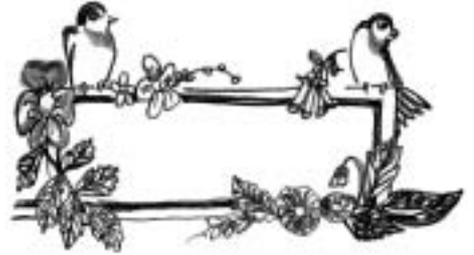
保健体育科指導員

永田 勲

フラット走で自身の歩幅を見つけ
る。歩幅からインターバルの長さを
割り出す。ハードルを置く位置が決
定され、目標タイムが班内で交換さ
れる姿が見られると、運動場が川と
化したように次から次へと人が流れ
るように走り抜ける。しばらくして
流れが止まったと思ったら、ストツ
プウォッチを見つめた目が走った足
跡を確認し出す。再びハードルが置
き換えられて人の流れができる。そ
れぞれの体は常に動いている。ストツ
プウォッチを持った者も足跡を確認
しながら併走する。スタート地点に
帰るときは学習カードをもとに意見
交換の時間となる。運動場に笑顔は
どこにもない。それぞれの目は一つ
一つのことを真剣に考え挑戦してい
る。

A中学校で出会った授業である。

ふるさとシリーズ この人に聞く



岡崎市ボランティア連絡協議会副会長

鈴木 珠子 氏

岡崎市ボランティア連絡協議会は七十三のボランティアグループで組織されている民間の団体である。

この団体は、福祉の街づくりを指したボランティアグループの情報交換と協力のもと、社会福祉協議会と協同し、各種ボランティア講座や福祉まつりの企画、ボランティアのレベルアップ講座などを行っている。また、ボランティアを依頼する人とボランティアをしたい人とのコーディネートもする。長年にわたりその実務を担当してみえる副会長の鈴木珠子さんにお話をうかがった。「わたしが、ボランティアにかかわ

るようになったのは、昭和五十六年からで、仕事をやめたときにどこかで社会とかかわっていたかと思っていたことがきっかけでした。最初は、ベルマークの整理や養護施設での洗濯、盲人の家庭で子供に絵本を読むことでした。」

鈴木さんは、これ以後十八年にわたり、ボランティア活動にかかわっている。現在は、点訳や盲人ガイド、大きい文字の拡大教材作りなど、視覚障害関係の活動が中心である。しかし、その間には様々な問題があった。

「障害者の人が旅行したいと言われても、介助ボランティアの交通費を誰が負担するのか、お年寄りに散歩をさせないと歩けなくなってしまうとアドバイスしても家族は何もしないなど、歯がゆい思いをしたことが何度かありました。」このような難題に直面しながらも多くの感激や感動があったという。

「ようやく、岡崎市だけでなく、県や全国でネットワークができ、視覚障害の人が気軽にいろいろなところへ旅行に行けるようになりました。旅行に行かれた人の笑顔を見ると、この活動をやっていてほんとうによかったと思います。」

鈴木さんの顔に思わず笑みがこぼれた。

岡崎市は全国的に見ると、ボランティアの数は決して多いとは言えないという。

「ボランティアは、関心があればほとんど自分で活動を広げていけるものだから、やりがいがあります。これから、もっとボランティア網が広がっていくといいなと思います。でも、究極的には、声高にボランティアと言わなくても不自由なく住めるような世界が理想的なんでしょうね。」

鈴木さんのお話から、改めてボランティアの意味を考えさせられた。

氏名 すすき たまこ
住所 真伝町供養坊十五十六



決して普通に言う楽しさは見られない。しかし、教室に帰るときの子供たちの顔には笑みがあり、そこからは満足感、成就感、爽快感、そしてほど良い疲労感が感じられた。

近年「楽しい体育」が、気楽で楽しい、好き勝手にできて楽しいと、楽しいという部分のみが一人歩きしているのではないかと危惧する。本来運動の楽しさは、苦しさを乗り越えて得る喜びや、緊張感の後の爽快感や満足感等、様々な過程を通して到達するものである。

「声・汗・真・考・走」。私が中学時代に恩師から教わったものであり、今も私の体育授業の中心となっている五原則である。元気な声を出し汗しながら真剣に取り組む。その中には自分の考えがあり、準備から集合に到るまで常に走る姿が見られる授業。この中に真の楽しさがあると考えている。

B小校長室でこんな掲示を見つけました。「訓練のない個性は野生です。厳しさのない優しさは甘さです。」

【推薦する専門書】

『新指導要領を生かした体育科の授業No.1』『同No.2』 小学館

●プロフィール

ことみつき けいじ
琴光喜 啓司

本名：田宮 啓司
 生年月日：昭和51年4月11日
 身長：182cm
 体重：151kg
 所属部屋：佐渡ヶ嶽部屋
 得意技：右四つ・寄り
 初土俵：平成11年 三月場所
 新十両：平成11年 十一月場所
 新入幕：平成12年 五月場所



角界の新星

琴光喜

琴光喜

昨年の大相撲九州場所、殊勲・敢闘・技能の三賞を総なめにした琴光喜関（本名、田宮啓司さん）は、小中学校時代を細川小学校、新香山中学校で学んだ「おかざきっ子」である。少年時代のエピソードを、母親の好子さんと当時の先生方にうかがった。今では百五十キロを超す巨漢の彼も、生まれたときは一か月早産の未熟児だった。そのため、ご両親は心配をしながら大切に育てていった。また、彼は明るい性格で六歳離れた兄とも兄弟げんかをすることもなく、近所でも珍しがられるほどの仲良しだった。相撲との出会いは、幼稚園のころだった。両親の実家のある高知の相撲大会に出てみたところ、簡単に勝つことができ賞品をたくさんもらったことから、相撲が好きになったという。小学校時代には、皆勤賞をとろうと決め、六年間、どんなに寒い日でも半袖・半ズボンで、遅刻や早退もせず、毎日休まず学校へ通った。熱が出て調子が悪くなった時、母親が迎えに行っても、絶対に帰ろうとしなかったというエピソードもある。中学校時代にも、数々の輝かしい成績を残している。その陰には、学校での日々の熱心な稽古や、父親が監督をしていた会社での社会人相手の厳しい稽古が隠れている。母親によれば、琴光喜関は努力型で、子供のころから、ライバル（豊田市出身の幕下の春ノ山ら）と競いながら一歩一歩階段を昇るタイプだったそう。こうした努力の蓄積が、現在の琴光喜関を支えていると言えよう。琴光喜関の勇姿は、岡崎市の児童生徒の励みになっている。これからますます活躍していくことを期待し、応援していきたいものである。

*取材に協力していただいた方々

田宮 好子さん（実母）
 牧内 映雄さん（後援会事務局長）
 小嶋 博美先生（中学校相撲部顧問）
 後藤 哲人先生（小学校6年時担任）

*手形は原寸



▲ 無敵を誇った市相撲大会 (中3)



▲ 遠足での一こま (中1)



▲ 学生横綱の勇姿 (日大4年)



▲ 東海大会での立ち合いの一瞬 (中3)

● 栄光の相撲戦歴

- 新香山中 県総体3年連続優勝
全国中学校相撲選手権大会準優勝
- 鳥取城北高 全国高校総体優勝
全日本選手権準優勝
- 日大 学生選手権97、98連覇
全日本選手権96、97連覇

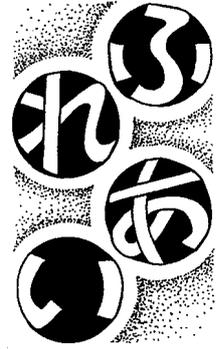
アマ獲得タイトル数27 (歴代2位)



▲ 得意の力強い寄り (平成12年九州場所)



▲ 十両昇進祝賀会 (竜美丘会館)



スペシャルスパイス

六ツ美中部小学校

森田 照美

交流している中学一年生と一緒に育てたサツマイモをどうやって食べようか話し合っていた時のことである。

気がつくと、A男がべそをかいていた。サツマイモの嫌いな彼は蒸しパンを希望したのに、多数決でスイートポテトになってしまったかららしい。「みんなが食べられるものにしたら。」

班の子たちにそう助言したのだが、どの子にとっても大切に育てたイモ。一年生に他者の気持ちを考える余裕はない。結局メニューは変わらなかった。

「みんなで作るから、きっとおいしいよ。」

いくら励まして、A男は、いじけたままだった。

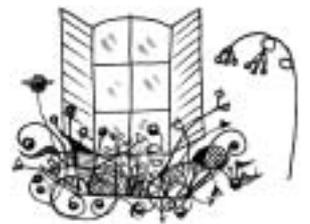


調理実習当日、私の心配をよそにA男は実によく働いた。中学生のお姉さんに手を添えてもらい、真剣な顔でイモを切ったり、つぶしたりと、自分でやれる仕事にどんどん取り組んでいた。

そして、いよいよ会食。私が見に行くと、なんと、皿はすでに空だった。びっくりする私を見上げてA男は、「おいしかった。」と一言。

自分たちで世話したイモ、中学生との楽しい活動、調理という初めての体験、その場の雰囲気等、いろいろなスパイスが合わさることで、特別な味を加えられたようである。

師弟同行



師の後ろ姿に学ぶ

上地小学校長

河村 喜美

昭和三十八年、渋谷先生が

担任してくださった三年四組五十名のうち、勉強も運動も中途半端であった私が教師の道歩んで二十九年、先生がいつも、どこかで見守っていてくださることが心の支えでした。

私を含めた当時の悪童たちの印象では、先生は平生穏やかに生徒に接してくださったが、他の先生方とは一味違う威厳が感じられました。

また、社会科の授業は分かりやすく、楽しかったことを覚えていきます。「授業の名手」という称号があるならば、先生こそその名にふさわしいと思います。

十年前、『岡

崎教育史要Ⅳ』の編集委員に加えていただいた時、先生は委員長として率先垂範の仕事ぶりを

通して、教育の歴史を後世に残すことの重要さを示されました。私にとっては恩師の後ろ姿に学ぶ貴重な経験となりました。

先生のご定年を期して開催した同級会の折、教え子一人一人に思い出を語り、励ましの言葉をかけておられた先生、傍らにいた私の心まで温かさが伝わってきました。私もこのぬくもりを教育の現場から絶やさぬように努めています。

先生のご定年を期して開催した同級会の折、教え子一人一人に思い出を語り、励ましの言葉をかけておられた先生、傍らにいた私の心まで温かさが伝わってきました。私もこのぬくもりを教育の現場から絶やさぬように努めています。

・如何に部下を愛し、伸ばしてやるかが、校長としての本当の仕事だ。人を生かすということは、その人の持味を生かしてやることで、校長の思うとおり型にはめこむことではないよ。

・校長たるもの、外部に対しては確固たる信念を持つて立ち向かい、内部にあつては愛情をもって職員に接するようになれば教育の権威もおのずから確立していく。

私は佐藤校長の警咳には接しなかったが、甲山赴任当時、先輩から師伝の一端を聞くことができた。河村君、『鐵樹』を届けるから親しく先哲にまみえ給え。

大樹深根

元六ツ美中学校長

渋谷 環

河村君は、私をはるかに超す将器の逸材。まことに頼もしく、かつ、欣快に思う。

今更、説教は野暮だ。さり

お知らせ



◆平成十二年度愛知県読書感想文コンクール

県知事賞

竜南中二年 小浜 千裕

県教育委員会賞

竜美丘小六年 植田 千紘

河合中二年 粟生彩有里

毎日新聞社奨励賞

六南小三年 大島 優美

県学校図書館研究会賞

矢南小四年 鈴木 愛里

県優良賞(小学校)

広幡小一年 浅野 晶子

大樹寺小一年 鈴木 智大

奥殿小一年 柴田 知寿

六西小一年 鈴木 真弥

大樹寺小二年 八木 沙彩

本宿小二年 清水 啓丞

大樹寺小三年 杉浦 圭祐

竜美丘小四年 植田 美咲

北野小四年 太田 智也

細川小四年 大井 笑理

矢西小五年 井上 晴香

六南小六年 松尾 智江

附属小六年 林 大地

附属中二年 鈴木麻里子

福岡中三年 矢野美奈子

河合中三年 太田 美穂

東海中三年 鈴木 康仁

東海中三年 鈴木 康仁

◆平成十二年度岡崎市健康優良児童生徒

美川中三年 村井 恵

はじめ一二四名

◆平成十二年度岡崎市よい歯の児童生徒

羽根小六年 石川 篤史

はじめ一二四名

◆平成十二年度岩瀬賞(体位優秀校)

小学校男子 生平小学校

小学校女子 竜谷小学校

中学校男子 附属中学校

中学校女子 城北中学校

◆歯科医師会長賞(う歯治療率一〇〇%校)

小学校男子 生平小学校

小学校女子 秦梨小学校

常磐南小学校

常磐東小学校

六ッ美中部小学校

六名小学校

竜谷小学校

生平小学校

秦梨小学校

常磐南小学校

恵田小学校

常磐南小学校

恵田小学校

恵田小学校

恵田小学校

恵田小学校

恵田小学校

◆平成十二年度岡崎市ごみ減量運動推進事業絵画作品展市長賞

大門小四年 春名紗季江

市議会賞

南 中一年 原田 裕子

南 中一年 原田 裕子

廃棄物減量等推進審議会賞

竜美丘小四年 坂田 仁志

教育委員会賞

南 中二年 本間 綾子

観光協会賞

南 中一年 清水 愛

◆平成十二年度西三河バスケットボール総合選手権大会

男子優勝 矢作北中学校

二位 竜海中学校

女子二位 南中学校

◆平成十二年度愛知県バスケットボール総合選手権大会

男子三位 矢作北中学校

◆平成十二年度岡崎市民柔道大会(優勝のみ)

中学校男子の部

北 中一年 大治 圭吾

竜南中二年 神尾 勇太

甲山中三年 山田 直毅

六ッ美北中初段 八田 康典

中学校女子の部

甲山中一年 安藤 夕貴

矢作中二年 森 智恵子

六ッ美北中初段 森 沙弥香

◆第三十四回愛知県教育研究論文

・個人研究の部

最優秀 六西小 原田 真弓

優 秀 南 中 中野渡善樹

佳 作 矢東小 大西 裕子

根石小 平野 泉

井田小 寄田加津子

岩津小 中野渡妙子

岡崎小 長谷川雄一

甲山中 浅井 圭子

◆第二十七回岡崎市小中学生作文コンクール

最優秀賞

細川小六年 吉田 篤史

河合中二年 本間かほり

優秀賞

矢東小二年 大島 康裕

六中小四年 畔柳高太郎

甲山中一年 中根 理沙

矢北中三年 多久和祐太

東海中三年 鈴木 康仁

◆東書教育賞

優秀賞 城北中学校研究部

代表 森 竜師



▲岡崎市小中学生作文コンクール表彰式 一公衆衛生センター

・カ
ツ
ト
六ッ美西部小 山中 武



給食室完工 (昭和29年)

わが国において学校給食が飛躍的に充実したのは、昭和二十九年に学校給食法が施行されてからである。岡崎市もこのころから、各校で給食室が設けられるようになった。

写真は、完成直後の校内の給食室である。直径九十センチメートルの大釜や煙突が三本見える。当時は、給食主任が中心となり、調理の食材、献立、調理法などを研究する会が頻繁に行われていた。給食室から調理の音が漂い、調理員の姿が見られたことは、子供たちにとって大変な喜びであった。岡崎市において現在のセンター方式が始まったのは、昭和四十六年からである。



写真提供 大樹寺小学校

順調に番付を上げてきている琴光喜関も、ライバルの出現や大きくなげなどの壁にぶつかってきた。乗り越えるのに必要なものは、自分を叱咤し、やり遂げる根性、そして、温かさで厳しさを併せ持った周りの人々の励まし。ど

シオ

「鬼は外、福は内」。子供たちは、元氣いっぱい豆まきをする。毎年恒例の節分行事。時には鬼が、恐い先生だったりして。子供たちの無邪気にはしゃぐ様子が温かさを運んでくれる。

まもなく立春。春の足音がもうそこまで聞こえる。

スア

水道水の冷たさに、手洗いという場から遠ざかる子供たち。風邪予防のために、子供たちを誘って手洗いに歩を運ぶ。キャッキヤと騒ぎながらも、冷たい水に手をやる姿に、笑顔が伴う。その笑顔を見ると、うがいの後のその快感が一層増してくる。

「IT革命」という言葉が市民権を得、学校のパソコン台数もすっかり増えた。そんなことを考えながら教室に入ると、そこには明治以来ずっと変わらず、子供や先生を見守り続けてくれているものがある。黒板よ、チョークよ。君たちは、これからも生き続けるか。



- * 決断 童門 冬二 ￥1500
NHK出版社
- * 礼儀覚え書 草柳 大蔵 ￥1400
グラフ社
- * 東海道歴史ウォーク 横山 吉男 ￥1600
東京新聞出版局
- * 不知火海 内田 康夫 ￥1600
講談社

***子どもがそだつ魔法の言葉**
ドロシー・ロー・ノルト他 著・石井千春 訳
PHP 研究所 ￥1500

「うそをつくな」と、父親からよく言われる子どもは、米英の五割強に対し日本はわずかに一割。これは、昨年発表された文部省の国際比較調査の結果である。豊川や名古屋の事件などが起こるたびに、子育てにお手上げ状態の親の実態が浮き彫りにされる。

親ならずとも、だれしも自分自身の生き方について、今一度じっくりと見つめ直してみたいものである。そんな時、大きなより所となるであろう「魔法の言葉」がちりばめられている。